

# ながえの里だより

医療法人ながえ会 広報誌(第41号)

発行日 令和5年5月18日

発行責任者 西村美智子



日本医療機能評価機構 認定病院  
医療法人ながえ会

庄原同仁病院

庄原同仁病院介護医療院

〒727-0203 庄原市川北町890-1

Tel : 0824-72-7300

Fax : 0824-72-7333

e-mail : info@nagaekai.com

URL : <https://nagaekai.com/>



「世羅高原にて」 撮影者 看護部 山吉広尚  
世羅高原のチューリップが満開でした。県外の方が多く、賑わっていました。

## 基本理念

わたくしたちは、すべての人に等しく  
仁愛の精神をもって接し、  
心の通う医療の実践に努めます。

## 基本方針

患者様の満足:常に患者様の立場に立って行動します。  
職員の満足:働きやすく、やりがいのある職場づくりに努めます。  
地域の満足:医療サービスを通じて地域の方々に喜ばれるよう努めます。

## 「つながり」について思うこと

地域連携室 室長 社会福祉士 山野友和

地域連携室の業務は、当院へのご入院の調整や療養生活上のご相談など多岐にわたりますが、「連携」という言葉のとおり、当院との様々な「つながり」を支援させていただくことが業務の柱です。

その「つながり」という言葉について考えてみますと、昨今のコロナウイルス感染症が社会にもたらしたものの一つに、「つながりの分断」が挙げられるのではないかと思います。当院においては、感染予防対策のために、幾度となく面会制限をさせていただくこととなり、その結果として、当院とご家族との「つながり」を希薄なものとしたことは否めません。終末期を療養される患者さまやご家族の心情を察すると、胸が締め付けられる思いに駆られます。

そのような鬱々とした日々のなかで、先日、心を打たれた出来事がありました。それは、当院からご自宅へ退院をされた男性患者さまの症例です。当院は長期療養型の病院・介護医療院であり、自宅退院をされる方は年間を通してほんの数例です。



その男性患者さまは、奥さまと二人暮らしで、長期の療養管理を目的に入院されましたが、入院当初より「家に帰りたい」としきりに訴えておられました。ご本人は、歩行が困難で、転倒の危険性が高く、スタッフはこまめに声掛けを行い、慎重にケアにあたりました。しかし、日ごとにそのお気持ちは強まり、表情は陰しく、「家に帰るから」とケアや食事も拒否をされるようになりました。



そこで、不安はあるものの、奥さまと話し合い、ご本人の希望どおりに退院とし、退院後の療養管理や在宅介護支援を近隣の開業医の先生、居宅介護支援事業所に依頼し、退院に向けての準備を開始しました。

当院の理学療法士が家屋調査に伺い、病棟スタッフの協力のもと、病室をご自宅に近い環境に作り変えて過ごしていただき、身体機能の評価を行いました。また、管理栄養士が奥さまに栄養指導を行うなど、多職種が関わり、退院調整を進めました。



ご本人の思いが強く、当初予定していた退院日が早まったため、退院後にご自宅でケアカンファレンスを行うこととなり、当院からは、私（相談員）のほか、病棟看護師、理学療法士が参加をさせていただきました。当院スタッフから情報提供を行い、先生を中心に今後の治療方針やケア計画について話し合いました。カンファレンス中、ご本人は「おーい」と奥さまを呼ばれるなど、終始穏やかな表情で、先生が「お父さんはどうしたい？家におりたい？」と問われると、「家におりたいよ」と答えられ、その光景に、何とも言えず目頭が熱くなりました。

私たちが日頃、「患者さま」とお呼びしている方々は、本来、「夫」であり、「父」でありと、社会の中での役割を持ち、その「つながり」の中で生活をしています。また、家によって結ばれた「つながり」の中で、感情的絆に基づいて生きています。この当たり前のことを、私たちは決して忘れてはならないと痛感しました。

今回の症例を通じて、今後はより一層、地域の皆さまとの「つながり」を深め、地域包括ケアの一翼を担える施設へとさらに進化していけたらと志を新たにさせていただきました。



## 絆とは — 一筋の感触か

医療法人ながえ会 理事長 村尾文規

古い二人 あめふるときがあろうとも 思い起こせよ初見せしとき

一人の古老が1日前倒しで病院を後にした。退院なのだから喜ぶべきなのだが、何か釈然としない気分であった。経緯はこうである。

入院当日、歩行に問題があって車いすを自走しているのだが、嘆息とも、呻吟ともとれる声を、とぎれることなく発しながら迷走しているように見えた。誘導しようとする声であらげる始末。ただ、見ただけだった。夕刻、疲れたから帰るので迎えにくるように電話をしてほしいというのである。スタッフがなだめて当日はおさまったのだが、翌日からは、ひっきりなしに『迎えに来るように電話してくれ』を連発するようになった。誰しも、家で過ごしたいのだから、その言動は理解できるのだが、様子は少し異なるように思えた。数日後、スタッフの電話に答えて来訪する妻を玄関先で待っていたときのことである。いち早く妻の姿を見つけて『おう、来た、来た』と得意満面であったと聞く。夫婦のことは夫婦にしかわからないと言うのではないか。ひょっとすると、このお二人、初めて会ったときの高揚感が今も、続いているかもしれないと思い始めたのだが、そんなはずはないと思い直して、お二人の繋がりを考えはじめた。

高揚する気持ちは長続きしないはずだ。パスカルの瞑想録には、『彼は10年前に愛した婦人を、もはや愛さない。そのはずである、彼女は以前と同じではなく彼も同じでない。彼も若かったし、彼女も若かった。今や彼女は別人である。彼は彼女が往時のようであったら、今なお愛したかもしれない』とある。

徒然草の一節を引くと、『妻といふものこそ男のもつまじきものなれ、、、、いかなる女なりとも、明けくれ添ひ見むには、いと心づきなく憎かりなむ。女のためにも半空(なかぞら)にこそならめ』と書いており、洋の東西を問わず、愛情とは、対極にある憎しみにも変わることを表している、愛情の遍歴はまさしくその人の人生そのものということか。

愛を深くて広く、定義するのは困難であるという記載もある。愛を含む言葉を辞書で調べると、50個を超える。愛情がなければ人は生きてはいけないのだから変わるのであろう。愛は好きに始まって放浪のちに憎しみに変わる。

病を抱えながら妻は自宅で見てやりたいと申し出てきた。お二人の繋がりは尋常ではないと感じた。歴史とは過去における変遷、その記録のことである。このお二人の夫婦生活のなかで、悲しみ、喜び、他愛もないことなど、まぎれもなく歴史である。歴史のなかに、強固な繋がりの原石のようなものが散りばめられているに違いない。夫婦のことは夫婦にしかわからないのは、それぞれの夫婦で、歴史が違うからである。

神は細部に宿るといふ、夫婦歴史の中の些事を思い出して見る。明確な言葉ではなく、歴史の中の、ごくありふれた当たり前のことから、それとなく感じ取ったこと、手触り、肌触り感のようなもの、人と人の繋がりには『ファジー制御』のような装置が備わっているかもしれない。つまり『一筋の感触』こそ、二人を繋ぐ拠り所ではないか、ファジーなもの、人間の知覚、感情、判断に伴う曖昧さこそ、繋がりの本態なのであろう。繋がりを体感すれば、解体された人と人の関係を繋ぎ合わせることもできるかもしれない。

退院後、自宅で行われた合同カンファレンスでは、穏やかな表情を見せていたと聞く。入院当日、嘆息とも呻吟ともとれる声を発しながら車いすで迷走したのは、無理にひき離された寂しさであったに違いないと思い直している。釈然としない思いは杞憂に過ぎなかったようだ。冒頭の拙句をエールとしたい。

翻って、自分はどうかであろうか、考え込んでしまった。



## Topics

# 屋外レクを行いました！



当院での毎日の限られた生活の中で何かワクワク、キラキラすることはないかと考え、この度屋外レクリエーションを提案し、実施しました。

当院の花壇には花が咲き、心地よい風が頬にあたります。屋外ということもあってか、普段参加しない方もおられ、いつもより多くの方が参加してくださいました。外で行うタオル体操は腕が伸び、掛け声も大きくなり、なによりも笑顔に溢れていました。シャボン玉をみんなで作り、「すごいね」「きれいね」と活気にあふれる姿にスタッフもうれしくなりました。

今後も定期的実施し、皆さんの笑顔を増やしていけたらと思います。

介護医療院 介護主任 福光登紀子

## NewFace

# 新入職員紹介

坂元 龍太 介護職員 医療病棟 令和5年3月入職

「右も左もわからない自分ですが、患者さんに寄り添えるようがんばります」

福間 菜歩 看護師 医療病棟 令和5年4月入職

「安全で丁寧な看護ができるよう心がけていきたいです。少しでも患者さんのお役に立てるように頑張ります」

福永 亜衣 看護師 医療病棟 令和5年4月入職

「慣れないこともありますが、先輩方にご指導いただきながら、日々成長できるよう努力していきたいと思います」

内藤 花奈 看護師 医療病棟 令和5年4月入職

「私は看護師として責任を持ち、積極的に患者さまに関わることができるよう頑張ります。病気だけでなく、身体的、精神的な健康をサポートしていきたいと思っています」

大岡 千奈美 看護師 医療病棟 令和5年5月入職

「新しい環境で不慣れなことも多いと思いますが、一日でも早くお役に立てるように努力いたします」



## 編集後記

今回は地域連携室の業務について取り上げました。地域連携室の日々の働きかけがあるおかげで患者様は安心して様々なサービスを利用できており、当法人においても重要な部署であることがわかりました。私自身も職種は違いますが、リハビリテーションをするにあたって、目の前の患者様が「これまでどのような場所で、どのような役割を持ち、どのようなつながりの中で生活してきたのか」を知ることはとても大切なことだと感じました。私もいつか患者様と言葉だけでは説明がつかないような、なんだか温かくてかつ強固なつながりが築けるような職員になればと思います。

当法人では患者様のご家族や地域の方々とのつながりをつくるきっかけづくりとして、Facebookを使った情報発信を行っています。SNSを通じて少しでも病院や介護医療院のことを知っていただき、様々な人たちと良好な関係を築いていければと考えています。興味のある方はぜひご覧ください。

リハビリテーション科 作業療法士 西岡進吾